


分科会1「一からはじめる学内の支援体制づくり」




## 大学戦略から見た障害学生支援体制づくり～名城大学の事例～

名城大学大学院 大学・学校づくり研究科  
田中芳則

1

## 発表の流れ



- ①「はじめに」各地での取り組みや、支援体制の構築について
- ②名城大学の概要
- ③名城大学のMS-15について(H18年度現在)
- ④学生支援体制の充実を全学の方針で位置づけ
- ⑤名城大学での障害学生支援の現状
- ⑥組織設計マネジメントの重要性と、支援体制の構築に向けて
- ⑦次の段階への提案
- ⑧今後の課題


2

## はじめに

- 障害学生の自助努力および教職員の熱意だけでは成り立たなくなっている。
- 日本学生支援機構の公表データからも障害学生の在籍数が明らかになり、高等教育機関での支援体制づくりが重要な意味を持ってきた。
- 全学支援体制で取り組む先進校の存在

3

## 名城大学の概要



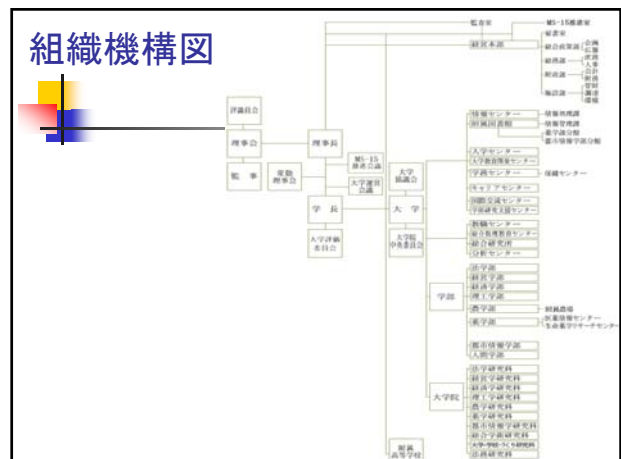
- 学生数 16,741名(H19.5.1現在)
- 8学部(法、経営、経済、理工、農、人間、薬、都市情報) 21学科
- 10大学院(法学、経営学、経済学、理工学、農学、薬学、都市情報学、総合学術、大学・学校づくり、法務) 24専攻
- 1926年開学、創立81年の中部地区の比較的大規模な私立総合大学

4

## 組織改革

- 2003年(H15年)度に事務組織の統合  
これまでは各学部で教務および学生係をおき、学部独自の修学支援および就職支援活動を展開していたが、統合後は、学務センター、キャリアセンターとして拠点を移した。

5



### 名城大学基本戦略(Meijo-Strategy-2015 通称、MS-15) 一平成17年度から

- **ビジョン(将来像)**  
一人ひとりの学生の自己実現をサポートし、広く社会に開かれた日本屈指の文理融合型総合大学を実現する
- ↓
- **ミッション(使命)**
  - (1)総合大学としての強みを活かし、バランスのとれた基礎教育と実践的な実学を重視することにより、学際的問題解決能力及び高度な独創的能力を有する専門職人材を育成する
  - (2)「総合化」、「高度化」、「国際化」による世界水準の新たな価値創造の拠点を築き、広く社会に貢献する

7

### 名城大学のビジョン、ミッション

(図は大学要覧より)

8

ガースサロナー他著(石倉洋子翻訳)「戦略経営論」

### ビジョン実現の戦略ドメイン(行動目標)

- 大学に必要な人材の確保と育成
- 教育の充実
- 研究の充実
- **学生支援体制の充実**
- 施設設備の充実
- 財政基盤の確立
- 卒業生及び父母との連携強化
- 知的財産の創造及び活用・産学官連携の推進
- 社会(地域)貢献

9

### 「学生支援体制の充実」の戦略計画

- 1 基本目標  
一人ひとりの学生の自己実現をサポートし、総合的支援により学生の満足度を高める
- 2 行動目標
  - **多様な学生支援体制の確立**
  - **卒業生の進路指導体制の充実**
  - **総合的、合理的な国際交流の体制づくり**

10

### 障害学生支援の現状(先行実施)

- 保健センターでの発達障害学生を理解・支援するための取り組み  
(対象:広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥／多動性症候群)
- 学生相談室 フレンドリーサロン
- 教職員を対象とした「メンタルヘルスガイド」の発行、メンタルヘルス講演会の開催  
(平成15年より実施、毎年11月ごろ)

11

### 国立特別支援教育総合研究所 発達障害のある学生支援ケースブック ー支援の実際とポイントー(H19年3月発行)

- 組織の連携に焦点をあてて 名城大学の例  
[http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub\\_b/b-210/b-210\\_2\\_5.pdf](http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_b/b-210/b-210_2_5.pdf)

12

### 障害学生支援の現状(先行実施)



段差解消機



駐車場

### 障害学生支援の現状(先行実施)



- 文部科学省の「私立大学等防災機能等強化緊急特別推進事業」③私立大学等バリアフリー推進工事
- 事業経費300万円以上
- 改造工事(実験設計費を含む)に要する経費の1/2以内を補助

### 障害学生支援の現状

- 先進校：日本福祉大学への視察
- 全国の支援状況の情報収集
- 聴覚障害学生 2名在籍(法1、理工1)
- 日本私立学校振興・共済事業団 私立大学等経常費補助金・特別補助「障害者の受入れ」(H19年申請済)
- 「ノートテイク取扱要項」(H19.4.1施行) 学務センター委員会で決定 学内ノートテイク制度は未完成
- 学内での情報保障の試行(H19.10.1から) 理工1名へ授業4コマにPCテイク

### 障害学生支援の現状

- 赤外線補聴システムの設置、学内8教室(H17年10月)
- 学務センター委員会 構成メンバー：各学部からと、教職センターおよび学務センターから各2名ずつ



講義室に設置されたシステム

### 障害学生支援の組織対応

- 出願前相談：入学センター、学務センター、志望学部による「大学・学部連絡会」開催
- 合格後相談：学務センターと本人の話し合い
- 授業時相談：あり(ただし本人からの申し出による)→保健センター、学務センター、当該学部、本人、適宜アドバイザー参加
- 学期末相談：なし

### 組織マネジメントの課題

(事務組織と学部組織の協働体制づくりの課題)



## まとめ～これからの課題

- 個人に頼らない全学的組織のあり方を考える
- 有機的に組織をつなげ、情報共有がなされる支援体制づくり
- 支援活動での実績づくり

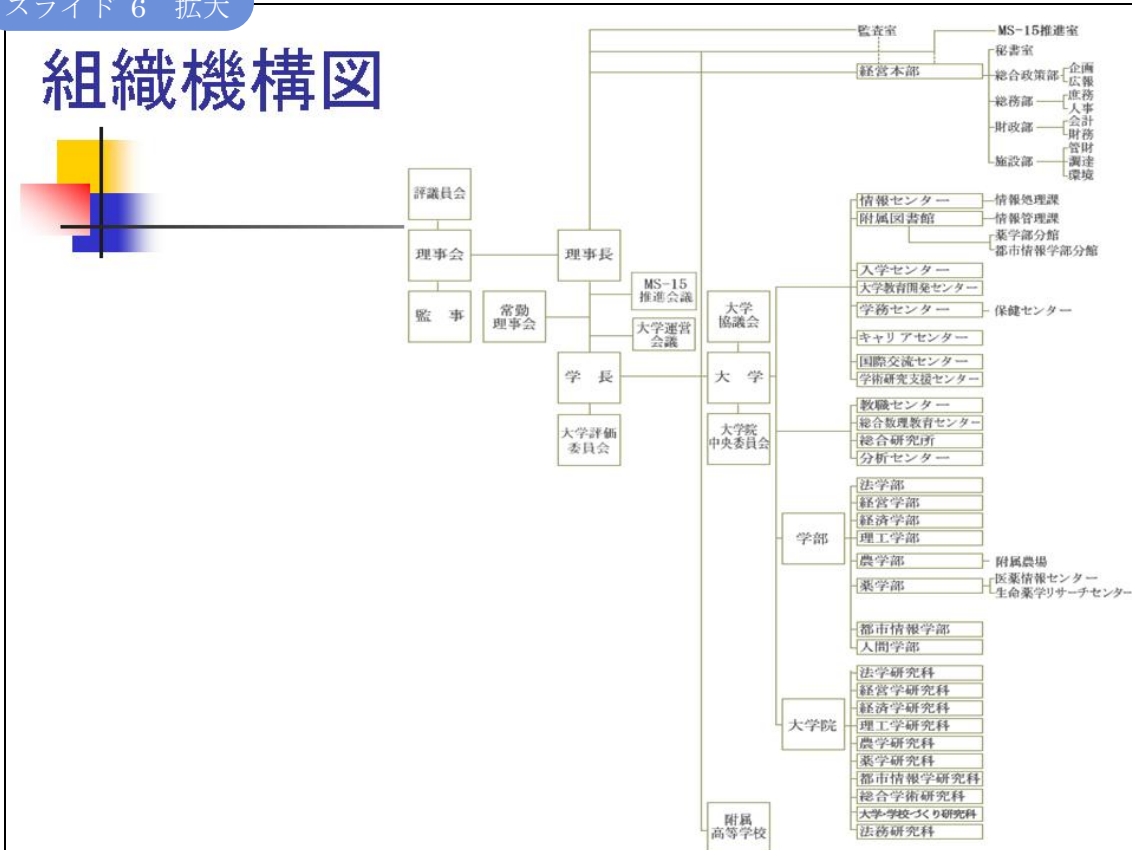
19

## 課題解決のための具体例

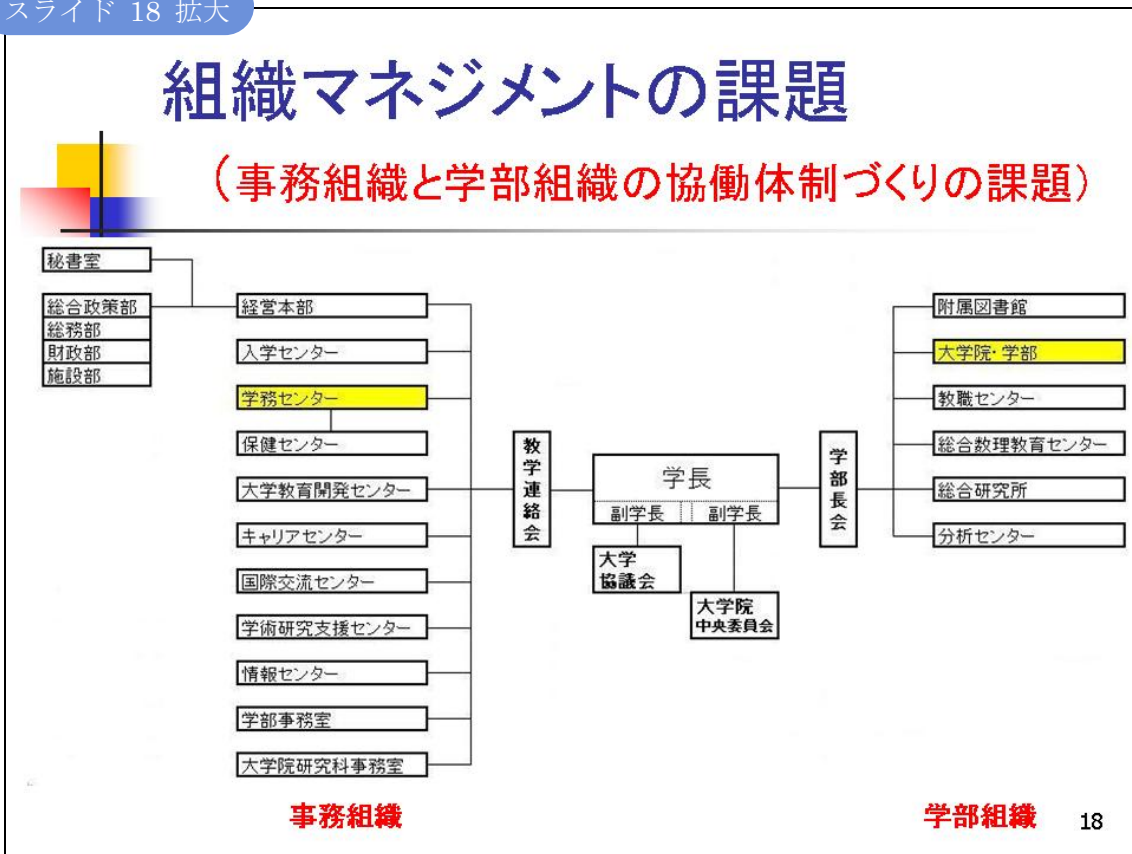
- 支援学生の養成
- ノートテイク制度の確立
- 学生協力員制度の活用(学長表彰あり)  
【主体は学務センター 学生活動・生活支援グループ】  
学生の諸行事に対する協力、新入生に対する支援、学生生活に対する支援、その他センター長の指示する事項
- ボランティア協議会との連携  
【主体は学生自身】  
地域クリーンアップ、防犯パトロール、災害発生地域における復興活動等の積極的なボランティア活動を展開

20

スライド 6 拡大



スライド 18 拡大



【分科会 2】

## 「聴覚障害学生のニーズとエンパワメント」

司会：石原保志氏（筑波技術大学）

企画：松崎 丈氏（宮城教育大学）

話題提供者：「聴覚障害大学生が自分自身のニーズを発見するための支援」

鈴木桂子氏（宮城教育大学 卒業生）

「米国、特にRITにおける取り組みの紹介」

吉田 稔氏（ロチェスター工科大学）

「米国・日本におけるエンパワメント支援の実態と課題について

－米国のエンパワメント活動の調査から－

太田琢磨氏（元ロチェスター工科大学留学生）

- 討論の柱**
- ①大学入学前後で聴覚障害学生が自身のニーズを発見し、申請するための支援
  - ②聴覚障害学生が支援の現状に対して自身のニーズを新たに作ることを促す支援
  - ③聴覚障害学生に対するエンパワメント支援のノウハウの結集・整理

### 企画趣旨

現在、大学・短期大学・高等専門学校に在籍する聴覚障害学生は1,000名を越え、聴覚障害学生支援に取り組む大学も増えている。しかし実際、聴覚障害学生のなかには、最初から自分のニーズを見出し、申請できているわけではなく、また自分のニーズをあえて直視しないように、または見出せないまま過ごしてきた学生も少なくない。また、支援の谷間におかれがちであった軽度・中等度難聴学生に対する聴覚補償支援が注目され始めている。さらに、入学の時点で大学が支援体制の基本をほぼ整えているケースが増えているため、聴覚障害学生には、入学当初にニーズを申請するだけでなく、支援体制の現状に対して新たなニーズを作り、問題の指摘や提案をすることを求められることもありうる。とすれば、聴覚障害学生は、これまで様々なバリアに直面してきたけれども、自分のニーズを見出し、支援を受けながらも自ら積極的に意見や提案を出して支援体制の強化に影響を及ぼすような存在に成長すること、つまり「エンパワメント」が重要になると言える。このエンパワメントを促すような支援の例として、入学時期に行う情報保障ガイダンス・個別相談、情報保障に関する事後検討会などが挙げられるが、実際、この具体的な方法・内容は大学によってばらつきがある。そこで、今こそ、上記の支援において、どのような取り組みが有効なのか、どのような課題があるのかを整理していく作業が必要であろう。このように、聴覚障害学生を対象とした「エンパワメントを促す支援のノウハウの結集・整理」が目前の課題になると言える。ちなみに、それに続く課題は「ノウハウの共同活用」になるだろう。

今回の分科会では、聴覚障害学生自身がニーズを見出し、さらに新たなニーズを作って動けるような支援の有効な取り組みや課題について議論する。話題提供者の鈴木桂子氏には、日本におけるエンパワメント支援のうち討論の柱①に関する取組の事例を報告して頂く。吉田稔氏には、討論の柱①と②について米国、特にRITにおける取り組みの事例を紹介して頂く。太田琢磨氏には、米国のエンパワメント支援の調査結果を報告し、日本におけるエンパワメント支援についての課題を話して頂く。その上で、参加者との討論を通して「エンパワメントを促す支援のノウハウの結集・整理」を図りたい。



話題提供「聴覚障害学生が自分自身のニーズを発見するための支援」

宮城教育大学 卒業生 鈴木 桂子氏

## 聴覚障害学生が自分自身のニーズを発見するための支援

宮城教育大学 卒業生  
鈴木 桂子

## 今日の話題提供について

- ☑ 背景
- ☑ 取り組みの一例
- ☑ (1)経緯(2)学生に会う前(3)会った時
- ☑ (4)話した内容(5)会った後
- ☑ まとめ

## 背景

聞こえるんだけど、聞こえないなあ・・・

みんなは聞こえるみたいだけど、私だけわからないみたい

自分以外の聞こえない人には会ったことがないわ

あ!!今誰が話したのかな??誰が話しているのかな??

私の話を分かってくれる人がいないの・・・

今きっと「OOO」って言ったんだよね

ああ...あの部分だけ、わかんなかった。。

聞き返したいけど、盛り上がってるから言えないよ...

これらのことを、周囲の人は知らないことが多い。学生自身も、気付いていないこともある。

## 取り組みの一例

### ☑ (1)経緯

宮教大:松崎先生 ← わたし

- ・宮城教育大学の先輩、後輩
- ・宮城県聴覚障害学生の会で活動
- ・指導教官として卒業論文の指導をもらう
- ・卒業後も相談ののってもらう

◇対象の学生◇

- ・普通高校卒の新入生
- ・聴力不明(本人も)
- ・聴者に近い聞こえのレベル
- ・聴者、会話環境により聞き取りのレベルが左右される
- ・意思表示はできるほうらしいが、聞こえにくい人としてのふるまいがわからないのではないか
- ・心の中ではイライラや奥ゆかしい思いを抱いているのではないか

あなたと似ている学生がいます。一度会って、話をしてもらえませんか。彼女にあなたの話をしたら、彼女も会いたいとのことでした。

## (2)学生に会う前

☑ 先生から彼女の状況をおおまかに教えてもらった。

私の心構えをする

- ・・・入学までのことの整理
- ・・・入学前後のことを思い出す
- ・・・学生時代の経験を話す
- ・・・先を見通したアドバイスを考える

☑ 彼女にメールをした。

- \*私もほとんど耳を使う
- \*似たような人に会ったことがない
- \*私も会いたい
- \*私も同じ状況です

彼女に安心してもらおう

- ・・・頼まれたから会うという感じをなくす
- ・・・同じ立場であることをわかってもらう
- ・・・私の聞こえの状態も簡単にわかってもらう

## (3)会った時

- ☑ 聴覚障害関係の知識や経験を上から押しつけないように、あくまでも自分の経験を語る。
- ☑ 考える手だてとなるように、アルバイトは何をしていたか、なぜそれを選んだか、なぜ辞めたか、自分に合っていたかどうかを話す。
- ☑ 彼女の考えを聞き出し、こちらの世界(難聴の世界?聴覚障害関係の世界?)に誘わない。
- ☑ 彼女がやりたいことを存分にやるように後押しする。

### (4)話した内容

バイトは何をしていましたか？

バイトは、居酒屋で皿洗いをした。自分には接客のバイトは無理だと思っていたので、人とあまり関わらない内容を選んだ。だけど、結局、調理場の中で聞き取れないことも多かった。その上、聞こえないふりをしてると傷つくことをたくさん言われ、辞めることにした。それ以外には、採点のバイト、障害のある子の家庭教師、プール監視もやった。採点は、時間の融通もきくし、特に誰かと会話が必要というわけじゃないからけっこうラクにできた。家庭教師も一対一だから、問題はなかった。プール監視も仲のいい友だちとやった。自分の中で、やりたい気持ちと聞こえにくいという理由でできるかどうかという気持ちがあって、自分のためにも、周りのためにも、自分にできないことは選ばなかった。でも、やりたいことがあるなら、それをやったほうがいい。

そのバイトを選んだ理由、聴覚障害を理由に辞めた理由をしっかりと説明。でも、あくまでも自分の気持ちで、彼女のやりたいことがあれば、応援。

### (4)話した内容

講義のときはどうでしたか？

近くにいる人なら、だいたい大丈夫だけど、講義だとちょっと違うよね。先生によって声もまちまちだし、ただ話しているだけならまだ聞き取れても、黒板のほうを向いたときには聞こえなくなるっていうかんじ。だから、先輩に勧められた通りノートテイクをつけてみた。だけど、結局は自分に十分な情報保障ではないってことがわかって、卒業ではそれを研究した。ノートテイクは自分が聞き取ったやつを確認に使うことが多かった。でも、ディスカッションのときは、友だちがいれば話をして、自分のいいように配置してもらおう。声だけで大丈夫な人はこっち、手話ができる人はこっち、ノートテイクする人はこっちというのをお願いしたこともあった。使い方によっては、効果が得られることもある。ただ、ノートテイクがいるっていう安心感があった。自分に必要だと思えば、つけておきたい。

普段の環境と異なり、聞き取れないことがあることを確認。軽度であってもノートテイクなどの情報保障が必要であることを適回しに示唆。

### (4)話した内容

教育実習は・・・？

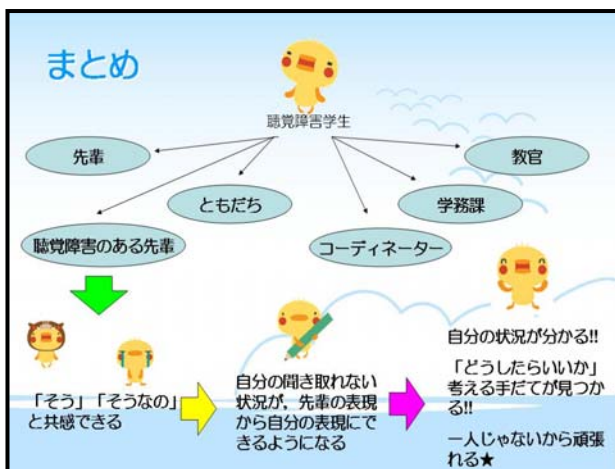
とにかくしんどかった。(…実習のカリキュラムの確認...) 3年次の附属小学校では、同じクラスに友だちがいなかったからなんとか頑張れた。4年次の市内の小学校では、一人だったから、相談にのってくれる人もいなくてつらかった。やっぱり、始めに「私は聞こえにくいです」という説明はするけれど、子どもの理解度はまちまち。というより、聞こえる・聞き取れることが多ければ多いほど、「聞こえる」＝「聞き取れている」＝「わかっている」と思い込まれる。それを打開することが難しい。それは子どもや周りの先生に限らず。実習生という立場では、例え当然の権利という情報保障をお願いすることは私にはできなかった。それに、時間や余裕もなかった。それぞれの学校での講話などにはノートテイクをつけたが、授業にはそれは通用しないので、結局のところしんどいだけで終わってしまった。

そのときに感じたことを、ありのままに。最後に、友だちや先生が力になってくれることを念を押して伝えておきました。

### (5)会った後

- ❑私自身が彼女に会えてうれしかった
- ❑紹介してくれた先生に感謝しよう
- ❑先生も力になってくれるし、私の仲間(在学している学生)も力になってくれるよ

ということ、メールしました。



### まとめ

アルム二制度・・・

米国にある先輩後輩連絡会。卒業後の、快適な大学生活を送る方法や学生の悩みを聞くためにCareerCenterが主催している。先輩の人生経験を学んだり、良き相談相手を見つける、ネットワーク作り、先輩たちが持つ外部プログラムへの参加を目的としている。

- ➡ 日本でもこんな制度があると、いいなあ・・・
- ➡ 現在あるものを、有効に活用していく
- ➡ 聴覚障害学生自身が、自覚する(あなたも先輩!)
- ➡ 関係者が積極的に連携する
- ➡ 専門知識を学ぶ大学。学部によってもぶつかる壁は違うし、考え方も違ってくる。大学や地域ごとのコミュニティはもちろんだら、それをカバーする全国的なコミュニティがほしい!



話題提供「米国、特にRITにおける取り組みの紹介」

ロチェスター工科大学 吉田 稔氏

# RIT・NTIDにおける 取り組みの紹介

ロチェスター工科大学・国立聾工科大学  
Rochester Institute of Technology  
National Technical Institute for the Deaf

吉田 稔

## ロチェスター市



- ➔ オンタリオ湖のほとりに位置した町
- ➔ エリー運河の開通に伴い、重工業が発達
- ➔ 全米屈指のろう者の人口密度のため、ろう者に対するサービスが充実している町
- ➔ 写真のコダック、印刷のゼロックス、コンタクトレンズのボシュロムの発祥地



## RITとNTID

- ➔ Rochester Institute of Technology  
(ロチェスター工科大学)
- ➔ 1829年創立 私立
- ➔ National Technical Institute for the Deaf  
(国立聾工科大学)
- ➔ 1965年創立 国立




## 空から見たRIT・NTIDキャンパス




### ロチェスター工科大学・国立聾工科大学の概要

(1) 学生全体の割合



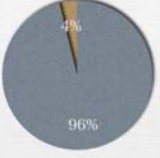
● 聴者  
● 聴覚障害者

(2) 在籍プログラム



● NTID  
● RIT

(3) 国内・国際学生の割合



● 国内 (米国)  
● 国際 (米国外)

(1) ロチェスター工科大学学生総数 15557人 聴覚障害学生の学生総数 1066人  
 (2) 聴覚障害学生の在籍プログラム RIT 484人 NTID 766人  
 (3) 聴覚障害学生 (国内・国際) の割合 国内学生 1202人 国際学生 48人

## 学生を取り巻く環境の変化

IDEA (個別障害者教育法)  
リハビリテーション法504条の施行  
ADA (アメリカ障害者法) の施行

➔

情報保障に慣れた  
学生の増加

その傍ら

人工内耳を装着した学生の増加  
英語を母国語としない学生の増加  
重複障害を持つ学生の増加

➔

学生の多様化  
学力の二極化

## 分科会2「聴覚障害学生のニーズとエンパワメント」追加資料

### RIT・NTIDでの取り組み

大学による公的支援の一環	学生のエンパワメント活動の一環
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生オリエンテーション (SVP)</li> <li>・新入生研修ガイダンス (FYE)</li> <li>・教員チューター制度 (Prof. Tutoring)</li> <li>・メンター制度 (Mentor)</li> <li>・カウンセリング (Counseling)</li> <li>・個別相談 (Advising)</li> <li>・進路決定 (Career Expl. Studies)</li> <li>・学生生活支援チーム (SLT)</li> <li>・薬物・アルコール中毒者支援 (SAISD)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラブ、スポーツ活動を通して仲間作り</li> <li>・学生 (ピア) による英語チューター制度</li> <li>・マイノリティ学生による団体活動</li> <li>・人工内耳の学生によるサポートグループ</li> <li>・NTID独自の学生会運営 (NSC)</li> <li>・大学学生寮の寮長 (Resident Advisor)</li> <li>・地域でのボランティア奉仕活動</li> <li>・様々な問題討論会の開催 (DSLAC)</li> </ul>
→自分自身のニーズを発見し、自ら問題を解決する能力を養うことを目的	→公的支援の元、自発的な活動を通してリーダーシップ力を養うことを目的

### 公的支援とエンパワメント活動の成果

- ・ 公的支援を通して、聴覚障害学生が少しでも自信をつけられるようにする
- ・ エンパワメント活動を通して、学生が問題意識を持ちながら自発的に活動出来るようにする。
- ・ その結果、学生自身が自ら率先して、問題解決に取り組める能力が向上する



- ・ RITにアメリカ大学史上初ろう学生会長の誕生 (昨年度)
- ・ 聴者学生よりも高い卒業率を維持
- ・ (聴覚障害学生：70% 聴者：64%)
- ・ 卒業直後の就職決定率：95% (昨年度)

### 自らの経験

- ・ (入学時) 国際学生としてさまざまな壁にぶつかる  
言葉の壁や文化の壁にぶつかり、外国人としての新たなバリアに直面する。自らの新たなニーズを認識する。
- ・ (大学二年) ピア英語チューターとしてさまざまな学生とかわる  
国際学生だけでなく、アメリカ人の学生が抱えている悩みや現状を目の辺りにして、自らのニーズと共に聴覚障害学生が抱えているニーズを再認識する。
- ・ (大学三年) 国際学生団体の設立、英語問題研究委員会の委員長として問題提起  
国際学生同士の連帯を高めながら、教職員や学生の啓発に取り組む。聴覚障害学生共通の問題である英語に関する問題の研究会の委員長として、自ら提案書作成に携わり管理職に現状の向上を求める。これらの活動を通して、積極的に問題解決に働きかける力を身につける。
- ・ (大学四年) 教職員の意識改善のための、パネルディスカッションの開催  
教員研修 (FD)の一環として、国際学生の特殊な問題に関して具体的な事例について学ぶ機会を作る。現場で学生と毎日関わっている教職員と横のつながりを持ち、信頼関係を築いていく。政治的なつながりや制度にどのような影響を与えていけるかを学ぶ。
- ・ (卒業後) NTID職員として、学生を支援する立場に回る  
卒業後、NTIDの職員に採用される。採用後、職員として学生を支援する立場に回り、学生の公的支援やアドボカシー活動を支援している。

### 日米の学生に関する考察

- ・ (米国)
  - ・ 情報保障を受け慣れていて、自ら情報保障制度の改善に取り組む姿勢が希薄
  - ・ 情報保障を受ける場合、本人の自己主張、自己決定が尊重される
  - ・ 情報保障制度が成熟した結果、学生の自主性が疎かになってしまっている
- ・ (日本)
  - ・ 多くの学生が大学入学後、初めて情報保障を経験する
  - ・ 情報保障制度や技術のレベルを改善しようとする向上心が高い
  - ・ 発展途上であるが、質の高い情報保障制度を築ける可能性が高い
  - ・ 米国の失敗点と問題点を分析し反映することで、質の高い情報保障制度を築ける可能性が高い



拡大図

### 自らの経験

- ・ (入学時) 国際学生としてさまざまな壁にぶつかる  
言葉の壁や文化の壁にぶつかり、外国人としての新たなバリアに直面する。自らの新たなニーズを認識する。
- ・ (大学二年) ピア英語チューターとしてさまざまな学生とかわる  
国際学生だけでなく、アメリカ人の学生が抱えている悩みや現状を目の辺りにして、自らのニーズと共に聴覚障害学生が抱えているニーズを再認識する。
- ・ (大学三年) 国際学生団体の設立、英語問題研究委員会の委員長として問題提起  
国際学生同士の連帯を高めながら、教職員や学生の啓発に取り組む。聴覚障害学生共通の問題である英語に関する問題の研究会の委員長として、自ら提案書作成に携わり管理職に現状の向上を求める。これらの活動を通して、積極的に問題解決に働きかける力を身につける。
- ・ (大学四年) 教職員の意識改善のための、パネルディスカッションの開催  
教員研修 (FD)の一環として、国際学生の特殊な問題に関して具体的な事例について学ぶ機会を作る。現場で学生と毎日関わっている教職員と横のつながりを持ち、信頼関係を築いていく。政治的なつながりや制度にどのような影響を与えていけるかを学ぶ。
- ・ (卒業後) NTID職員として、学生を支援する立場に回る  
卒業後、NTIDの職員に採用される。採用後、職員として学生を支援する立場に回り、学生の公的支援やアドボカシー活動を支援している。

## 『米国・日本におけるエンパワメント支援の実態と課題について』

### －米国のエンパワメント活動の調査から－

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業 第1期生  
元ロチェスター工科大学・国立聾工科大学 留学生  
太田 琢磨

#### 米国の調査で明らかになった実態や課題

- ・エンパワメント支援に関わる人々は、以下の専門知識を有する人たちである
  - ・ソーシャルワーク修士号,カウンセリング修士号,ろう教育修士号もしくは博士号の所持者
- ・エンパワメントの援助を行うことのできる専門家は多いが、聴覚障害者に関する知識を持ち、手話で流暢にコミュニケーションを取ることのできる人は多いとは言い難い
- ・エンパワメントの支援は学生の意識向上だけのために利用されるわけではない
- ・人工内耳を装用した学生の増加

#### ミレニアムスチューデント問題

- ・定義
  - ・1980年～2000年の間に生まれた学生であり、パソコン、携帯電話などの新しいテクノロジーと共に育ってきた学生
- ・何が違うのか
  - ・直接的コミュニケーションだけではなく、間接的コミュニケーション（電子メール・メッセージ等）にも慣れている
  - ・コミュニケーション方法が多様である
  - ・これまでに培ってきた支援ノウハウだけでは対応しきれない

#### 「エンパワメント」に関する両国間の特徴や違い

##### アメリカ

- ・多様なマイノリティに対応するための支援という側面がある
- ・エンパワメント支援に主に関わるのは専門家がほとんどであり、障害学生専門の部署が設けられている

##### 日本

- ・学生の権利擁護といった側面が強い
- ・必ずしも専門家が関わっているわけではなく、障害学生専門の部署が設けられていることは希である

#### エンパワメントの定義とは

社会福祉援助活動(ソーシャルワーク)において、利用者、利用者集団、コミュニティなどが、力(パワー)を自覚して行動できるような援助を行うこと。利用者などの主体性、人権などが脅かされている状態において、心理的、社会的に支援する課程を言う。その目的は、脅かされている状態に対して、利用者、集団、コミュニティ等が自立性を取り戻し、その影響力、支配力を発揮できるようにすることである。1980年以降、米国、イギリスを中心に発展してきた手法であるが、現在では社会福祉援助活動の動向として根付いてきた。「新版 社会福祉用語辞典」中央法規出版 より



## エンパワメントの3つの段階とは

### 1. 自己変革

当事者が自分の潜在的ニーズを発見する段階

### 2. 集団変革

同じニーズを持つグループの力を強めていく段階

### 3. 社会変革

社会に対してニーズを明らかにし、理解を求めていく段階

## 聴覚障害学生に対するエンパワメント支援

- ・当事者が自分の障害を様々な角度から捉え、今自分の持つ潜在的ニーズを把握できるようになること
- ・潜在的ニーズを理解し今必要な支援を他者に訴えていくコミュニケーション能力を身につけること
- ・同じ悩みや課題を持つグループの中で互いが影響を与え合いながら成長していくようになること
- ・社会に出てから遭遇する様々な障壁を乗り越えられるよう、自ら行動を起こして行かれる実践力を身につけること

## 支援者に求められる技術とは

- ・解決への道を作るのは支援者ではなく当事者である
  - ・答えを与えるのではなく、今当事者が持つ潜在的ニーズを当事者自身が受け入れ、その後どうするべきかを考えて行かれるプロセス作りを行う
- ・短期目標だけではなく、学生の入学から卒業、そして社会に出るまでの長期的目標も立て、支援を進めていく
- ・当事者が社会に出て、自らの力で様々な障害を乗り越えていく力と思考能力を身につけられるように支援をする

## 日本における今後の課題

- ・エンパワメントの意義を理解し、それを実行できる専門家の育成
- ・手話で聴覚障害学生とコミュニケーションが取れる専門家の育成
- ・その専門家をスーパーバイズするスーパーバイザーの育成
- ・コーディネート、カウンセリング両方に対応できる人材。なおかつ聴覚障害者以外の障害者への支援のできる人材の育成
- ・短期計画だけを視野に入れるのではなく、入学から卒業までを一貫して支援するという長期計画も視野に入れて、支援を行う人材の育成



話題提供「米国・日本におけるエンパワメント支援の実態と課題について

—米国のエンパワメント活動の調査から—

元ロチェスター工科大学留学生 太田 琢磨氏

『米国・日本におけるエンパワメント支援の実態と課題について』

—米国のエンパワメント活動の調査から—

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業 第1期生  
元ロチェスター工科大学・国立聾工科大学 留学生  
太田 琢磨

米国の調査で明らかになった実態や課題

- エンパワメント支援に関わる人々は、以下の専門知識を有する人たちである。
- ソーシャルワーク修士号、博士号の所持者
- カウンセリング修士号、博士号の所持者
- ろう教育修士号、博士号の所持者
- エンパワメントの援助を行うことのできる専門家は多いが、聴覚障害者に関する知識を持ち、手話で流暢にコミュニケーションを取ることのできる人は多いとは言えない
- エンパワメントの支援は学生の意識向上だけのために利用されるわけではない
- 人工内耳を装着した学生の増加

ミレニアムスチューデント問題

- 定義
  - 1980年～2000年の間に生まれた学生
  - パソコン、携帯電話などの新しいテクノロジーと共に育ってきた学生
- 何か違うのか
  - 直接的コミュニケーションだけでなく、間接的コミュニケーション（電子メール・メッセージ等）にも慣れている
  - コミュニケーション方法が多様である
- これまでに培ってきた支援ノウハウだけでは対応しきれない

「エンパワメント」に関する  
両国間の特徴や違い

- アメリカ
  - 多様なマイノリティに対応するための支援という側面がある
  - エンパワメント支援に主に関わるのは専門家がほとんどであり、障害学生専門の部署が設けられている
- 日本
  - 学生の権利擁護といった側面が強い
  - 必ずしも専門家が関わっているわけではなく、障害学生専門の部署が設けられていることは希である

エンパワメントの定義とは

- 社会福祉援助活動(ソーシャルワーク)において、利用者、利用者集団、コミュニティなどが、力(パワー)を自覚して行動できるような援助を行うこと。利用者などの主体性、人権などが脅かされている状態において、心理的、社会的に支援する課程を言う。その目的は、脅かされている状態に対して、利用者、集団、コミュニティ等が自立性を取り戻し、その影響力、支配力を発揮できるようにすることである。1980年以降、米国、イギリスを中心に発展してきた手法であるが、現在では社会福祉援助活動の動向として根付いてきた。
- 「新版 社会福祉用語辞典」中央法規出版 より

エンパワメントの3つの段階とは

- 1. 自己変革
  - 当事者が自分の潜在的ニーズを発見する段階
- 2. 集団変革
  - 同じニーズを持つグループの力を強めていく段階
- 3. 社会変革
  - 社会に対してニーズを明らかにし、理解を求めていく段階

### 聴覚障害学生に対するエンパワメント支援

- 当事者が自分の障害を様々な角度から捉え、今自分の持つ潜在的ニーズを把握できるようになること
- 潜在的ニーズを理解し今必要な支援を他者に訴えていくコミュニケーション能力を身につけること
- 同じ悩みや課題を持つグループの中で互いが影響を与え合いながら成長していくようになること
- 社会に出てから遭遇する様々な障壁を乗り越えられるよう、自ら行動を起こして行かれる実践力を身につけること

### 支援者に求められる技術とは

- 解決への道を作るのは支援者ではなく当事者である
- 答えを与えるのではなく、今当事者が持つ潜在的ニーズを当事者自身が受け入れ、その後どうすべきかを考えていくプロセス作りを行う
- 短期目標だけではなく、学生の入学から卒業、そして社会に出るまでの長期的目標も立て、支援を進めていく
- 当事者が社会に出て、自らの力で様々な障壁を乗り越えていく力と思考能力を身につけられるように支援をする

### 日本における今後の課題

- エンパワメントの意義を理解し、それを実行できる専門家の育成
- 手話で聴覚障害学生とコミュニケーションが取れる専門家の育成
- その専門家をスーパーバイズするスーパーバイザーの育成
- コーディネートおよびカウンセリング両方を担う人材。なおかつ聴覚障害者以外の障害者への支援のできる人材の育成
- 短期計画だけを視野に入れるのではなく、入学から卒業までを一貫して支援するという長期計画も視野に入れて支援を行う人材の育成

(分科会3)  
利用学生、情報保障者、教員の三者による  
情報保障の質的充実

**教員からの要望、  
そこから一步踏み出すには・・・**

新國三千代  
札幌学院大学人文学  
(バリアフリー委員会代表)

1

**教員からの要望、  
そこから一步踏み出すには・・・**

(内容)

- 札幌学院大学の講義保障の現状
- 講義担当者が困っている／問題視していること  
どうしたらよいか？
- 講義保障の利用学生に対する要望  
一步踏み出すには・・・
- 情報保障者に対する要望
- 教員も学ぶ場が必要
- まとめ

(参考資料:教員対象のアンケート)

2

**札幌学院大学の情報保障の現状** 3

2007年度前期の情報保障状況  
(バリアフリー委員会のHPに掲載)



利用学生 8名      テイカー配置科目数      テイク形態

所属学部	学年	学生数	授業形態	科目数	形態	科目数
人文学部	1年	1	英語(外国人)	3	PC	22
人間科学科	2年	1	実習	3	ノート	46
	3年	2	ゼミ	4	ノート & 手話	3
	4年	1	講義	61		
社会情報学部	2年	1	合計	71	合計	71
社会情報学科	4年	1	講義保障に配置された実数65名 (内訳)PC14名、PC&ノート4名、 ノート44名、ノート&手話3名			
法学部 法律学科	1年	1				

(参考)2006年度 前+後期158科目

**ノートテイカー & PCテイカー養成講座**

新学期:新入説明会(数回)  
各学期開始時1~2ヶ月間:毎週2回開催  
定例テイク講習会:月1回(経験者も参加)  
(方法)  
先輩と被テイカーが間に入り、後輩に助言  
模擬授業(先輩、教員)  
先輩が作成した手引き書を更新しながら使用  
ノートテイクとPC要約筆記講座を同じ場所で開催

テイク講習会

手話学習会  
週1回

4

**教員が困っている／問題視していること**

1. どの程度伝わっているのか？
2. 聴覚障がい学生がテイクされた内容をどのように理解しているのか？

↓

個別的、適当な質問や問題を用意して、理解度を把握する。  
テイクの内容と照合して、理解の仕方を把握する。  
これを地道に積み重ねる。

↓

ノウハウを蓄積→教員で共有

(参考意見)  
意思疎通が図れなかったことはない。必要に応じて、メールで資料を配布したり、プレゼンの資料の文字を大きくしたりすれば、テイカーのヘルプもあり、十分に授業を理解してくれているし、試験結果なども他の学生と全く差がない。

5

**教員が困っている／問題視していること**

3. 授業のペース？

↓

情報保障者と利用学生が講義担当者に  
意見・希望を伝える

↓

試行錯誤しながら、相互に折り合いをつける

(参考意見)  
あまり意識すぎると、進度が(予定よりも)遅くなったりする可能性はあるが、聴覚障がい学生やテイク学生を意識した説明の繰り返しや強調が他の学生にとっては「ちょうど良いペース」となっているという側面もあるように感じている(講義アンケートの結果から)。

6

**教員が困っている／問題視していること**

4. テイカーが学生の両横にいつも座ることで、クラスメートとの関わりが希薄になる(ゼミ)

↓

PCテイクなら、両横に座らなくてもよい。  
無線が使用できれば、かなり離れて座っても大丈夫

ノートテイクで解決するのは難しい！

7

**教員が困っている／問題視していること**

5. グループ討論などで情報保障がなされているか？

↓

グループ討論では、  
PCテイクが対応しやすい(実況中継可)  
ノートテイクの場合は、手話通訳も加えた方がよい  
(情報保障者の人数に余裕があれば)

◎司会者の役割←教員教示必要  
(発言を促す間合いのとり方、討論の進め方など)

8

**教員が困っている／問題視していること**

6. 少し複雑な言い回し(講義)や討論(ゼミ)が求められるとき、その内容を複雑さも含めて捉えられたかどうか？

7. 図式化しにくい根源的な掘り下げをするのが難しく、表現しやすいことしか話さなくなる。

↓

????

(参考事例)

「宗教学」の授業の中で「世界の宗教音楽」CD流す  
“不都合や疎外感を感じていないか、いつも気になる”  
メールアドレスを知らせて、学生と連絡取り合う”  
→メールでCDを流す意味やその内容を詳しく説明し、  
気になっていることを聴覚障がい学生に伝える。  
学生も希望や意見を伝え、双方が納得した形で進める。  
→意見を交換する手段(メール)持つ、努力 → 一歩進む 9

**情報保障を利用する学生への要望**

1. 遠慮なく、質問、要望を出して欲しい。  
理解できる部分・できない部分、苦情、配慮して欲しいこと  
授業後に来て欲しい、具体的に要望を出して欲しい  
(情報保障者と一緒でもOK)

↓

(多くの講義担当者)  
出来る範囲で改善する  
講義の最初の段階→早目に改善できる

(参考事例)

質問用紙のようなものを常に持ち歩き、気がついたときに  
書き込み、講義担当者に渡す。

10

**情報保障を利用する学生への要望**

2. 授業を受けて、授業の仕方や内容がどうだったのか？  
授業に関する評価や意見を知らせて欲しい

↓

授業評価アンケートにそのような項目を追加すればよい！  
直ぐに実現できる → 一歩進む

3. 情報保障を利用しながら、勉強する方法を学ぶ

↑

大学でその機会を用意する必要がある

11

**情報保障者(学生)への要望**

1. テイカー同士のおしゃべり(テイクの打ち合わせ?)  
授業が始まったら厳禁

↓

打ち合わせは、授業前に済ませて！

2. 要望を講義担当者にどんどん伝えて欲しい

↓

要望用紙をいつも持ち歩き、気がついたときに記入  
授業終了後、講義担当者に提出する。

12



### 講義保障者が付いた授業

(講義担当者の声)

- ・緊張感がある
- ・自分の講義の欠点を意識し、直さなければというプレッシャーがより多くかかる
- しかし、それは必要なこと、ありがたいと思っている
- ・口調、スピード、誤解のないような配慮など必要なことがわかった。



授業改善(FD)につながる

さらに、情報保障者や情報保障を利用する学生の声



授業改善の強力な後押し

13

### 教員も学ぶ場が必要

教員も参加したいと思うような支援体制作り



- ・教員にノートテイク講習会の模擬授業の講師を依頼する。
- ・授業スタイルの違う教員を選ぶ
- 教科書と板書、プリント、ppt(プレゼンテーション)使用
- ・情報保障者や利用学生はどんどん意見を述べるべし！

(教員の感想)

テイク活動について知る事ができる。  
テイク結果で自分の授業を客観的にみる事ができる。  
とても良い経験、依頼があれば、次回も引き受けたい！



情報保障、情報保障者に対する理解が深まる！

14

### まとめ

1. 情報保障者と利用学生は、  
講義担当者に意見／希望を伝える  
手段を工夫：メール、要望用紙を持ち歩く  
気がついた時に忘れずにメモする
2. 直ぐに実現できることは実行！→一歩進む
3. 講義担当者を味方にする  
「課題解決への道を探る」→教員は関心を示す！
4. 利用学生、情報保障者、教員が相互に理解を深める  
共通の場を様々な形で設ける  
例)情報保障者の養成講座に三者が参加

→ 三者による情報保障の質的充実


15

## 対 談

# 「米国の支援現場に学ぶ コーディネート・養成・情報保障」

司会: 白澤麻弓  
ゲスト: Patricia A. Billies氏  
Marcia E. Kolvitz氏

## PEPNetとは・・・?




## 日本聴覚障害学生高等教育支援 ネットワーク



## PEPNet USA 地域センター紹介

Marcia Kolvitz, PEPNet-South  
(ペップネット南部地域センター)  
University of Tennessee, Knoxville  
(テネシー大学ノックスビル校)



- 学生数 26,000名
  - 内9名がろう学生
  - 内7名が難聴学生
- 15名の手話通訳者
- 13名の文字通訳者

## PEPNet USA 地域センター紹介



Pat Billies, PEPNet-Northeast  
(ペップネット北東部地域センター)  
Rochester Institute of Technology (RIT)  
National Technical Institute for the Deaf (NTID)  
(ロチェスター工科大学 RIT、アメリカ国立聾工科大学 NTID)



- 学生数 14,000名
  - 内1150名が聴覚障害学生(ろう、難聴、すべてを含む)
- 110名の手話通訳者
- 55名の文字通訳者

## PEPNet内部組織の変革

### アウトリーチ担当スタッフの削減



(経過?)

13名の担当スタッフ	→	5名に削減
各州に1名の担当者	→	1名が2-3州を担当

(原因?)

アメリカ合衆国政府による規定の変更  
専門・能力に応じた職員の雇用

## “コーディネーター”

- PEPNet コーディネーター
- 大学における障害学生支援室 (DSS) コーディネーター



## PEPNet による大学支援

- ワークショップ



## PEPNet による大学支援

- ペップネット関連資料・教材の発行



## PEPNet による大学支援

- 全米大会の開催



## PEPNet による大学支援

- オンライントレーニング、及びその教材の開発



## PEPNet の相互援助・情報交換

- PEPNet ML・メーリングリスト (> 会員500名)



- PEPNetファミリー(運営委員) ML (会員50名)

## PEPNet コーディネーターの課題

- **課題:** 通訳者の供給不足



- **解決策:**
  - ・ 遠隔ビデオ通訳 (VRI)
  - ・ 大学間での通訳者の共有
  - ・ 手話通訳者/文字通訳者の総合教育
  - ・ オンライン技術を通しての通訳者共有



## PEPNet コーディネーターの課題

- **課題:** 教職員とのコミュニケーションの円滑化

- **対策策:**
  - テレビ電話リレーサービス(VRS)
  - 字幕通話



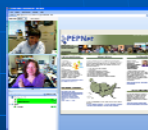
FM補聴器 またはポケットトーカープロの使用  
文字チャット/Email/携帯メール



## PEPNet コーディネーターの課題

- **課題:** 自己開発の必要性

- **対策:**
  - ・ 個別教育/個人指導
  - ・ ウェブキャスト
  - ・ 電話を使った指導
  - ・ オンライン学習教材を提供



## PEPNet コーディネーターの課題

- **課題:** 生徒からのサービスに対する苦情

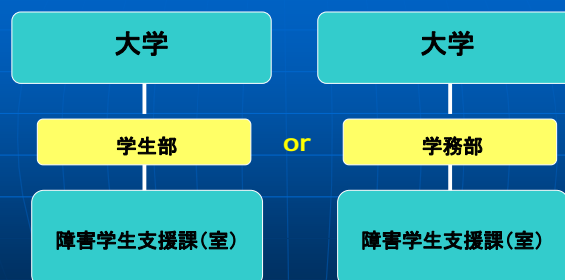
- **対策:**
  - ・ 適切な方針の設置
  - ・ 事前対策
    - ハンドブックの作成
    - 米国障害者法(ADA)の本



## 米国における 聴覚障害学生支援サービスの変革

- **1970s** 聴覚障害者支援プログラムを導入していたのは一部の大学のみ
  - 多くの聴覚障害学生がこれらの拠点校に入学
- **1990** 米国障害者法の施行 (ADA)
  - 各大学に1-2名の聴覚障害学生が入学するようになる
- **一世代**で支援サービス形態が劇的に変化！

## 障害学生支援室の位置づけ





## 障害学生支援室(DSS)

### ■ 支援室のスタッフは?

- 室長(ディレクター)
- 手話通訳者コーディネーター
- 手話通訳者
- 文字通訳者
- ノートテイカーコーディネーター
- 事務スタッフ



## 障害学生支援室(DSS)

- 各大学に一名のDSS室長(ディレクター)を設置



- DSS室長(ディレクター)が手話通訳/ノートテイクのサービスをコーディネートする場合もある

## 障害学生支援室(DSS)

### ■ DSS局長(ディレクター)が持つ資格:

- ろう者学
- カウンセリング
- 手話通訳
- リハビリテーション



## ろう者の障害学生支援室職員



Bobbi Cordano

障害学生支援室 室長  
(ディレクター)

University of  
Minnesota  
(ミネソタ大学)



## ろう者の障害学生支援室職員

R·I·T



Pamela Lloyd, Disability Services Coordinator  
Rochester Institute of Technology  
(ロチェスター工科大学 障害学生支援コーディネーター)

## ろう者の障害学生支援室職員

Lori Corcoran

Coordinator for Disability  
Services  
障害学生支援コーディネーター

Quinsigamond Community  
College  
クインシガモンド・  
コミュニティー・カレッジ



Quinsigamond Community College

## ろう者の障害学生支援室職員



Corinne Brennan-Doré

Director of Disability Services  
障害学生支援室室長(ディレクター)  
University of Massachusetts  
Amherst  
マサチューセッツ大学  
アマースト校



## RIT 史上初のろう学生会会長

Lizzie Sorkin



## 支援サービス提供までの流れ(米国)



障害を持った生徒が  
DSS事務局に必要書類を  
持参する



生徒がDSSIに支援サービスを  
要請する—授業科目によって支  
援内容が異なる場合がある

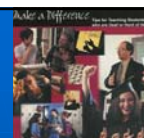


DSSが支援内容を決定し  
対象となる授業を担当する教職員に連絡

## 教職員への啓発活動

### ■ 支援サービスを教職員に説明する

- 手話通訳者とのやり取りについて
- 文字通訳・字幕について
- ノートテイカーの使用について
- 聴覚障害を持つ生徒のニーズ  
に合わせた効率的な指導
- チップシート  
(聴覚障害学生支援ガイド)



## - 質問タイム -



?-?-?-?-?-?-?-?-?-?-?

ありがとうございます。

